

英語⇔フランス語⇔ロマンス語 ⇒クレオール諸語：間言語理解

粕谷 祐己

KASUYA Yuichi
Université de Kanazawa
ykasuya@staff.kanazawa-u.ac.jp

2016年の現時点で、フランス語教育振興についてたくさんできることがある。たくさんすべきことがある。とくに *féderer* するのが当然であるような活動と *féderer* することである。

フランス語がイタリア語、スペイン語、カタルーニャ語、ガリシア語、ポルトガル語やそのほかの言語とともにラテン語を祖とする「ロマンス語」と呼ばれる言語群に属すること、そしてそのロマンス語は地球上に数億の話者を持っていることは間違いない。フランス語教育がロマンス語一般の教育の一翼を担うという視点があることは明らかである。

また現代フランス語の元となった言語が 1066 年のノーマンコンクエスト以来イングランドの言語に与えた永続的影響は、そのことを考慮しなければ現代英語の実用的な深い理解が困難であるような性質のものであるのも確かである。

そしてフランス語は、クレオール語と総称される言語群のうちのかなりのものをその影響下に成立させたのであり、それらのクレオール語を対象言語として習得を試みる際にはフランス語の知識・能力の充実を介することが現実問題として有効であることも疑えない。

ロマンス諸語教育とも、英語教育とも、クレオール諸語教育——ハイチ語は徐々に国語としての尊厳をもちつつある——とも *féderer* していくことこそグローバル時代のフランス語教育の目指すべき姿勢であると考えたい。

そう考えたとき、間言語理解 *intercompréhension* が大きな鍵となってくる。間言語理解とは言語教育においてまさに諸言語の *féderation* を目指すものであるからである。

1. 英語教育とフランス語教育の *féderation* : 外国人留学生を前にして

金沢大学も他の日本の大学と同様に、多くの外国人留学生を招いている。2016年4月の時点でその数は500名を突破したらしい。今後もまだまだ増やしていこう。留学生の獲得は奨励されており、留学生は大事にされる。理論的に考えれば、留学生が支持し求めるものは肯定的に扱われることになるはずである。

筆者はこれまですでに十人近い外国人留学生から通常の、日本語を媒介言語とするフランス語初級のいわゆる文法クラスに出席したいとの希望をきいた。第二、第三の外国語を学ぶ意欲

の旺盛な留学生たちであっても、故国でバランスのとれた外国語教育を受けてきているとは限らない。特にコミュニカティブ・アプローチの、CEFR の時代である現代において、ある意味で「文法」教育の軽視が世界的傾向になっているのであり、「日本式」のきっちり文法を学ぶ方式は、それにこだわり過ぎることの弊害を注意深く避けるなら、案外世界に対する日本の教育の「個性」としてアピールしうるかもしれないのである。教育内容が彼らの期待に合わず断念されたという例がそれ以前にあり現在はその希望は謝絶しているが、あるいはもう少しやり方を工夫すれば、特にそれに合った教科書を開発するならば、外国人留学生にも満足してもらえるフランス語文法クラスの構想は不可能ではないのではないかと考える。

しかし日本の大学が外国人留学生の大多数に想定している言語能力はあきらかに日本語能力よりも英語能力である。フランス語を対象言語とする語学クラスを、媒介言語を英語とする形で存在させるとき、フランス語教育はグローバル時代のコンテクストの中で新たな意義をもってたちあられる。

プライベートな形で試行していた「英語によるフランス語」クラスを 2013 年からは留学生も履修可能ながらとりあえず日本人学生向けの科目、つまり金沢大学国際学類の選択必修科目「ヨーロッパ研究特論 E [Special Lecture : European Studies E]」（科目名最後の E は、英語により実施される科目であることを示し 2014 年度から付されている）としてスタートさせた。二年前に留学生向けの「短期プログラム」KUSEP (=Kanazawa University Student Exchange Program)科目にも加えてそのシラバスに掲載した。そのため現在ではこのクラスは日本人学生と外国人留学生のジョイントクラスになり毎年平均 10 名程度の履修者がいる。授業は後期(10 月開始) 木曜 5 限 (16 時 30 分-18 時)である。「ヨーロッパ研究特論 E」のシラバスには以下のように記載してある(都合により英語記述は簡単なものとしてある)。

OBJECTIVE 授業の目標 : Learning French using full of your etymological knowledge and your capacity of English.

Intercomprehension とは語学教育の「メソッド」ではなく、未知の言語を前にしたとき既知の言語の知識を駆使して理解しようとする姿勢のことであると言っていいでしょう。当授業では特にフランス語と英語の関連に関心を集めて、両言語の習得において相乗効果が期待できる体制を考え、工夫をこらしていきます。

LEARNING OUTCOMES 学生の学習目標 : Have an overview of French grammar and of relation of French and English vocabulary, based on an intercomprehension.

Intercomprehension の考え方を参考にしながらフランス語を学び、フランス語学習と英語学習の相乗効果が期待できるような教育の形を考えることです。

使用教材は Evelyne Amon, Judith A. Muyskens, Alice C. Omaggio Hadley : *Vis-à-vis, Beginning French*, McGraw Hills, 2011 (fifth edition)のごく一部、Kiyohiko Azuma, *Yotsuba&* (version française), tr.Eve Chauviré, éditions Kurokawa, (English version), tr.Amy Forsyth, *ADV Manga* (日本語原書はメディアワークス社刊)そして Edwin O.Reischauer, *Histoire du Japon et des Japonais* (Seuil, 1997) の一節(元寇の記述の箇所)である。

授業の進め方の詳細については別の機会に譲りたい。ただここで報告しておきたいのは、これまでの 3 年間でこの英語によるフランス語クラスにやってきた留学生たちが「1066 年のこと」をほとんど知らなかったことである。これはほとんどの国でしっかり教えられていないのかもしれない(このことについてアンケート調査を試みる価値はある)。かわりに根拠薄弱

な「フランス語は難しい」という風評被害は受けている。フランス語教育と fédérer させたほうがむしろ英語もよくわかるというような視点もちうる状況にはないのである。

ならば英語とフランス語の歴史的関係を日本から出来る限り客観的に留学生に学んでもらって各自の英語理解に役立ててもらいそれを世界に拡散してもらおうというイメージを持ってみるのも、あながち荒唐無稽なことではないのではないか**

**"Intercomprehension"については、あえて Wikipedia 英語版の解説を引用しておく。なお日本語における訳語としての「間言語理解」は粕谷雄一・佐藤雅人の提唱するものである。

Intercomprehension is when people try to communicate with each other using their own different languages. Intercomprehension can be explained as a dialogue between people from two different languages. Each one expresses in their own language, making efforts to understand each other. (2016年5月1日最終閲覧) ここで"understand each other"とは「相手の言語を習う」ことを含意すると考えたい。

** David Crystal, *Spell it out : the singular story of English spelling*, Profile Books, London, 2012 のような一般向けの書籍も、この種の啓蒙を少しずつ準備しているように思われる。

2.ロマンス語教育とフランス語教育の **fédération** : 「マイナー言語」のひとつの学習意義

金沢大学は愛知県立大学およびスペイン、サンチャゴ・デ・コンポステラ大学(USC)、ポルトガル・ミーニョ大学(UM)とともに「天の川 Via Lactea」という半年近い期間におよぶ相互学生交流のプログラムを平成27年より実施中であるが、ポルトガル語のクラスはなくスペイン語専任教員さえいない金沢大学としては学生を送りだすときの語学教育が問題になる。ブラジルとの交流推進のためブラジル・ポルトガル語教育が充実するきざしがあるのは喜ばしいが、ポルトガルのポルトガル語はやはり少し違う。さらに USC での授業にはガリシア語による授業も含まれているのである。教える側からすれば明らかにガリシア・アイデンティティを守るための活動の一環であるが、学ぶ日本人学生の方はたいへんである。

だが筆者は *intercompréhension* の発想による代表的教材 *EuRom5**をもちいてフランス語既習ながらスペイン語未習の学生さん、スペイン語既習ながらポルトガル語未修の学生さんたちに、主に未習言語の読みを教授した。最初に試みたフランス語既習者へのスペイン語教授は、本人の感想によると「役にたった」ということであるがそれはまだこの一例であり、今年の3名の帰国後の報告が待たれるところである。ただ教えた側の印象としてはブラジル・ポルトガル語（そしてその中の、たとえばサン・パウロとリオ・デ・ジャネイロの言葉の差異）とポルトガル・ポルトガル語（そしてその中の方言差）とガリシア語を並べてみるならば、それら相互間の差異というのは結局程度問題にすぎないということが明白に見えた**。

EuRom5 型のロマンス語教材にガリシア語を加えた形のものを作れば、ロマンス語に属する未習言語に柔軟に対応することのできる能力の開発という学習意義もほのかに見えてくる。

ガリシア語テキストの実例として、この言語で書いた詩人で最もよく知られた人の作から一節あげておこう。

Probe Galicia, non debes
Chamarte nunca Española,
Que España de ti se olvida

Cando eres, ¡ ai !, tan hermosa. Rosalia de Castro, *A Gaita Gallega*

哀れなガリシアよ、おまえは決して
自分をスペイン人と呼んではならない
どんなにおまえが美しくとも、ああ
スペインはおまえを忘れている ロサリア・デ・カストロ『ガリシアの風笛』
(『ロサリア・デ・カストロという詩人』桑原真男、沖積舎、1999年、254, 223頁)

このテキストの単語のいくつかにポルトガル語、スペイン語、カタルーニャ語、イタリア語、フランス語の対応する単語を並べた表を作り、巻末にガリシア語文法をこれら5つにガリシア語を加えた6言語の並記の形で付して整備するならばガリシア語のための *EuRom5* 型教材ができることになる。

*Elisabetta Bonvino, Sandrine Caddéo, Eulalia Vilagínés Serra, Salvador Pippa, *EuRom5*, Ulrico Hoepli, Milano, 2011. Wikipedia 英語版の *intercomprehension* の項をさらに引用しておきたい。Here we find some European methods to learn Intercomprehension. These four methods were the pioneer in this branch of linguistics and started around 2000 in different universities: *Galatea*, *EuRom4*, *EuroComRom (Les sept tamis)*, et *Understanding romance languages*. All these methods focused in reading skills learning simultaneously in different Latin languages as these languages are so close in semantics, phonetics, etymology etc. (2016年5月1日最終閲覧)

**もっとも天の川プロジェクト参加学生の語学指導はほかにスペイン語、ポルトガル語に堪能な日本人教員、ブラジル人留学生が協力して担当したので、筆者ひとりの *EuRom5* による貢献がどの程度のものかを正確に評価するのが難しいことは付け加えておく。

3. クレオール諸語教育とロマンス語教育の *fédération* : 言語としての尊厳

言語は、多くの非ネイティブ話者を獲得する力を持ってはじめて真の尊厳を持ち得るのではないか。今日世界の知識人層の認知と敬意を受けているクレオール諸語であるが、未だネイティブ以外に多くの話者を獲得する状況には至っておらず、これらの言語が尊厳を得るための道はまだ遠い。

クレオール語はひとつではない、ということも大きい。ロマンス語同様クレオール語は、複数の言語の集合体であり、その中では他を圧する代表者はいない。

イタリア語やスペイン語がラテン語から意識的に距離を置いて自らを確立したのと同様、クレオール諸語はフランス語やスペイン語など植民者の言語から自らを引き離す必要があるが、それでもなお、自らが世界で学ばれ、話されるためには現実問題としてそれら植民者の言語を仲介しなければならないというジレンマもあると言える。

ならばここでフランス語やスペイン語を単一で扱わず、イタリア語やカタルーニャ語、ガリシア語とあえて「一緒くた」にして、クレオール「諸」語と同列に並べてはどうだろうか。

たとえば *EuRom5* 流の *intercomprehension* に基づいた扱いをグワドループ・クレオール語による *La Gwadeloupèyèn / La Guadeloupéenne* (Abel Beaugregard 1902-1957)の歌詞の一行に適用するとどうなるか。

Lé nouvo ka vin o péyi

(これはフランス語にすれば *Les nouveaux Qui viennent au pays* の意味であるが*、それはテキストのどこにも掲載されない。代わりに適宜以下のような単語の対応を表として提示する。)

P : pais E : pais C : pais I : paese F : pays G : péyi

(もちろん P でポルトガル語、E でスペイン語、C でカタルーニャ語、I でイタリア語、F でフランス語、G でグワドループ・クレオール語を示してある。ここに M=マルチニク・クレオール語などを加えていくのを方針とする。)

EuRom5 では文法編が巻末にまとめて置かれていて、そこではこの本で扱われている言語全てに共通する文法事項、および特定の言語にのみ該当する文法事項についての、この本で扱われている言語全てによる解説を並記している。それに倣えばこの歌詞に関して、クレオール語特有の文法事項として「ka は習慣的、進行的事行を示す」という解説を PECIFG の全ての言語で示したものを加えることになる。)

このように間言語理解の発想を導入すれば、すべては「類縁性のある言語」ということになり言語的な上下の感覚を理論上希薄にすることができるのではないだろうか。

以上、全てはまだ発想の始まりの段階に過ぎないが、読者がフランス語教育について将来の方向性を考えるヒントとなれば幸いである。

*この歌の歌詞の転写、解説（文法を含む）をしてくれた Louis Solo Martinel 氏に心より感謝したい。